

## ＜メディアウオッチ＞ 東電会見から見える汚染水問題の深刻な構図

上出 義樹

東京電力福島第一原発で相次ぐ汚染水流出問題は、政府による2年前の事故「収束宣言」が、全くの見せかけに過ぎなかったことをあらためて示した。非常事態とも言える一連の高濃度放射能汚染水の流出については濃淡の差はあれ新聞やテレビが報じているが、週3回のペースで開催される東電本社での記者会見に参加していると、大手メディアがあまり触れないフリーランス記者らの鋭い質問や指摘を耳にする機会が少なくない。その記者会見からは、汚染水問題の深刻さと、核心部分に触れるやりとりが伝わってくる。

### 過去最悪の規模の流出

まず簡単におさらいをしたい。最近大きく報じられている福島第一原発の汚染水流出には、主に2種類の問題がある。一つは、原子炉建屋内や排水設備内のたまり水などが天然の地下水を通じて海に流れているもので、記者たちの再三にわたる質問や追及を認める形で東電が7月22日にやっと公表。それまで東電任せにしてきた政府が原子力規制委員会とともに直接対策に乗り出している。

二つ目は、原子炉の冷却などで1日に約400トずつ増え続ける高濃度放射能汚染水の貯蔵用タンクからの漏えいである。8月19日の漏えい確認後、流出量が過去最悪の300ト規模に上るとの報告を東電から受けた原子力規制委は21日、国際原子力評価尺度で8段階の上から5番目の「レベル3」（重大な異常事象）に相当するとの見解を示している。

### フリーランス記者がタンク製造業者に取材し核心を突く質問

このうち、高濃度放射能汚染水が流出した問題のタンクは、5分割した底板をボルトで締める簡易組み立て式で、溶接式に比べ工期が短い半面、耐用年数も短いなどの弱点がある。東電は今回の漏えいで想定される流出箇所として①開閉用バルブ部分②タンク底部③基礎コンクリートの地盤改良部分一を挙げているが、漏えいの原因や経路は特定されていない。

この漏えいタンクに関連して8月23日の記者会見で、東京工業大の博士号を持つフリーランス記者のまさのあつこ（政野淳子）さんが興味深い質問をしている。まさのさんは、問題のタンクを製造した東京機材工業に直接取材。それに基づき、①タンクの底板（フランジ）は施工業者の大成建設が材料を選定しているが、きちんとボルト締めなどを行っているかが大切なポイント②地盤に少しでも傾きがあるとタンクに負荷がかかりやいと指摘。こうしたタンク設置の重要な留意点などについて東電が同社からヒアリングしたかどうかを質問したところ、「現時点ではヒアリングしていない」との答えが返ってきた。

### 東電の無責任ぶりをあぶり出す

東電会見では大手メディアの記者も、目視によるおざなりなタンク群のパトロール体制や、相も変らぬ東電の隠ぺい体質などになかなか厳しい視線を向けている。しかし、取引

業者との関係にまで踏み込んだまきの記者の鋭い質問は、大手メディアとはひと味違う形で東電の体質の核心を突き、汚染水問題の深刻な構図を浮き上がらせている。タンク製造業者へのヒアリングという当然の基本動作さえできていない東電の無責任ぶりが上手にあぶり出された形だ。

その東電は翌 24 日に臨時の記者会見を開催。問題のタンクにはなんと「事故歴」があることを明らかにした。東電によると、当該タンクはもともと別の場所に設置されていたが、基礎コンクリートが 20 ㌫ほど地盤沈下したため、同じ区画の他の 2 基のタンクとともに解体し、「H4」と呼ばれる現在の区画に移設して再利用した。ただ、再利用に当たっても特別な点検はしていなかったというから、あ然とするばかりである。

### **会見担当スタッフは自信なげに「確認させてください」を連発**

一連の汚染水流出が問題になるなか、毎回の記者会見では、記者たちの質問に対して東電の担当スタッフが、自信なげに「(後で) 確認させてください」の言葉を、多い日で 20 - 30 回も連発する。これも、事態の深刻さの反映なのかもしれない。

(かみで・よしき) 北海道新聞で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院博士後期課程(新聞学専攻)在学中。